

神経発達症（発達障害）について

【はじめに】

現代社会において、お母さん達の子育ての悩みはいっそう深刻である。こだわりが強い、思いどおりにならないとパニックになる、多動で落ち着きがない、衝動的で行動を抑えられない、先生の話が聞けない、気が散ってすぐ違うことを始めるなど、保育園や学校での社会適応が難しいと評価される子どもの割合は、今や5～8%となっている。このような子どもの多くは、注意欠如・多動症あるいは自閉スペクトラム症などの発達障害（最近では神経発達症と呼ばれる）と診断され、必要に応じて個別支援級への進学、認知行動療法や薬物療法が適応される。

【神経発達症の原因】

主な原因は、ドパミン系およびノルアドレナリン系脳内神経回路が関係する前頭前野の機能低下である。また、社会環境、家庭環境、副鼻腔炎やアデノイド増殖症による睡眠障害など様々な要因も関与している。その中で、私が近頃気になるのは、1) 前頭前野の発達を妨げる社会環境の変化と、2) 家庭や教育現場での子どもの問題行動に対する許容範囲の低下である。

【社会環境の変化と神経発達症】

脳内神経回路のうち、意欲・やる気を出させるドパミン系神経回路、集中力を高めるノルアドレナリン系神経回路、情動を安定させるセロトニン系神経回路は、人間力・社会適応力の発達に大変重要である。これらの脳内神経回路の発達には、幼少期からスキンシップしながらよく褒め（ドパミン系）、危機感のある遊びを多く体験させて集中力を鍛え（ノルアドレナリン系）、早寝早起きの規則正しい生活に基づいて情緒を安定させなければならない（セロトニン系）。しなしながら、昨今の子ども達の生活は、ゲームなどの一人遊びが多いため人に褒められる機会が少なく、公園からは危ない遊具は除かれ、夜更かしすることも普通になっている。

神経発達症の薬物療法は、これら3つの神経回路の機能を強化させる治療であるが、薬物を投与する前に、スキンシップを交えて大げさに褒め（ドパミン系）、行動への集中（「ながら」をしない）と危機感のある遊びをさせて（ノルアドレナリン系）、早寝・早起きをして太陽光をしっかりと浴びるとよい（セロトニン系）。

【子どもの問題行動に対する許容範囲】

神経発達症の子ども達の親には、しばしばこだわりの強さや衝動性の特徴をみることがある。また、別の親には不注意や人の話を集中して聞けない特徴をみることがある。しかし彼らは、特に治療を受けずとも、小児期にはおそらく多くの失敗を経験しながら徐々に成長し、友人や周囲の大人に助けられ、自分に合った職業につき、よく社会適応している。

現代では、神経発達症の子ども達が繰り返し失敗することに対する許容範囲がいくらか狭くなったように思われる。学校からは、他児への影響を心遣して、個別支援級を勧められる。母親も忙しく、衝動性や段取りの悪さのために、子どもが朝の支度に時間がかかっていると、何とかならないかと専門クリニックを訪れる。もう少し子ども自身が、失敗の中から何かに気づき、自ら学ぶ機会を十分与えられる社会が望ましいと思うのだが。

【まとめ】

問題行動が、生活上の大きな支障になっている場合には、本人が自信を失って問題がさらに複雑になる前に、認知行動療法や薬物療法を行うことが必要である。しかし、大きな支障になっていなければ、まず人間力・社会適応力の発達のために、褒める、よく遊ばせる、規則正しい生活を送らせることを心掛けたい